

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	雪解けの日 : 小説
Author(s)	山本, 直太郎
Citation	龍南, 178 : 29 - 56
Issue date	1921-07-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7787">http://hdl.handle.net/2298/7787</a>
Right	

# 雪解けの日

山 本 直 太 郎

私等が中學の四年の時の事である。

二月の中頃、私と寄宿舎で同室に居た青木の所に或晩一人の女が尋ねてきた。その女はそれから三度訪ねてきたけれど初めの二度は私達の部屋には這入つて來なかつたから三度目に私達の部屋にくる迄は彼女がどんな女であるか又どんな話をしたか私は知らなかつた。

最初の時、それは晩の八時頃であつた。

私らが飽き／＼勉強して居るところに小使が青木に面會人ですよと呼びにきた。

「一体誰かな、俺に用があるのは。舍監ではないらしいから安心だね。一寸行つてくるよ。」

青木は向ひ合せの机に居る私にかう言ひながら、何げなく、むしろこの訪問者が私らの單調な勉強を破つたのを喜んでゐるやうな風をして出て行つた。

青木は半時間位したら歸つてきた。さうして私にどんな事が起つたかを話した。

「何、うちの家番の女だ。僕は誰かと思つて最初應接室に行くど誰も居ないのだ。それで今度は小使室の所

に行くぞ驚くぢやないか。小使があの人だと言つて指した所を見ると、あの湯呑場の入口に一人の貧しい女が立つてゐるのだ。近づいてみるとその家番の女だつた。僕はあんな女が訪ねてきたには參つてしまつた。何の用かいと訊ね乍ら中に這入れ／＼といつてもちつとも入つてこないで僕も到頭出て行つたんだ。そして寒さに震ゆ乍らそこで彼女の話を聞いてゐたのだ。」

青木はこゝで急に聲をひくめて、外の二人に聞こえない様に（他の二人は、も一方の隅に机を並べてゐた）。

「實はね、僕の父、去年の夏死んだあの父の幽霊が出ると言ふんだ。僕の家の中にね、眞夜中になると。僕はそれをきいて大變おこつたんだ。そんな莫迦なことがあるものかと言つてね。けれどやつぱり父の幽霊なんて言はれると氣味が惡かつたよ。そうして其女がそれでどうかしてくれといつたから僕は腹が立つてしまつたからどうかしてやると言つて歸してしまつたのだ。もつと言つてきたらあいつらは僕の屋敷から追ひ出してしまふから譯はないよ。家一軒荒したつてかまひはしないから。けれど、やつぱり良い氣味はしないよ。」

青木には、でも此の話もあまりこたへなかつたらしく、一寸浮んだ淋しい表情の中にも莫迦らしいことをきいたつていふ風ないろがあつた。こんな話しをきくにはあまりに忙がし過ぎるといつた様な風があつた。

當の青木がかなり無造作に話したことが割に私には感動が起つた。私はふと何かに行き當つた様なある感じがしたのであつた。

私は先頃青木のお父さんの死に就てこんな事をきいていた。青木のお父さんが死んだのは此の（去年の）夏休みの事であつた。私はそれを九月になつて學校に出初めてからやつと知つた。其時まで青木はまだ寄宿舎には居なかつたので私とはあまり知り合つて居なかつたから。

青木のお父さんは赤痢で死んだのだそうである。青木はお父さんの病氣中一寸も家にも、勿論避病院にもよりつかず長崎や温泉やをあちこち遊び廻つていくら電報で知らしても歸つてこずに遂々お父さんの死に目にも會はなかつたさうだ。

實際その頃青木は普通の者どちがつていた。單に中學の放埒者がする仕業以外に。内心善良である癖に彼はそんな事に冷淡がる人間であつた。そして表面的にはそれを得意がる様な性質さを持つてゐたのである。「親父が死んで大安心だ」と言ひ廻ることのある彼であつた。

青木の近所の者で寄宿舎の炊夫をしてゐるYと言ふ男が話した所によると

青木のお父さんが愈々火葬にされて其骨が大坂の郷里に送らるゝ時、骨壺に骨がは入りきらずに幾らかの骨は家の裏山の中に棄てられたさうである。そして此頃はそこを通ると其邊に幽霊が出るといふ噂があるさうだ。Yはそれが全く青木の不孝に原因してゐると言つた。私は之をきいた時まさか幽霊が出るなんてないだらうと思つた。けれど骨を棄てたのは事實かもしれないと思つてゐた。そしてそれは事實であつたのである。

今、青木から本當の話をきいて私は恐れてしまつた。

「あいつらは僕が骨を棄てたから幽霊が出ると言ふんだ。實際僕は父の骨を棄てたけれど（青木は別段變つた表情はして居なかつた）、其時僕は「壺には入りきれないから許して下さい」と願つての事であつた。そして外の骨は太切にして送つたから悪いことはないだらう。（彼はこの時變に淋しう言つた）。」

「それをね。あの家番の女らが家賃をもぐらうと思つてそんなこと、幽霊が出るつてなことを言ひふらすの

だ。さう言ふとね、借り手がないからつて勢ひ安く貸さねばいけないだらう。それをあいつらが何も知らない者に高く借しつけて儲けやうとして居るのだ。」

最初の日の話は此丈であつた。

其翌日も亦前の女が來た。此度は初めは面倒がつて會ひに行かなかつたけれど暫くすると亦小使が呼びにきた。今度は舍監の名で呼ばれたので仕様ことなしに青木は立つて行つた。

一時間半以上もしてやつと青木は歸つてきた。私は彼が泣いて居るなど思つた。しばらくして彼は言つた。

「あの女が舍監室に居るんだ。そして凡てを舍監に打明けてしまつていたんだ。僕は舍監から大變叱られた。………あの女が「公人様、あなたは何故勉強なさらないのですか。此頃あなたはどうしてそんなに自墮落になられたのですか。私は御恩を被つた旦那様に申し譯がありません」といつて泣くのだ。そして「先生から承ればあなたは大層よい成績(青木はその時彼のクラス四年甲組で四番であつた)そうではありませんか、早く心を入れかゝて中學を卒業しそれから海軍の學校には入つて立派な軍人になつて歸つて下さいと尙泣き續けた。(青木はまた最前の感情が湧いたらしく自分も泣いてた、私もいつしか泪のたまるのをおぼれた)。………けれど僕はあの女が泣いたつてあまり氣にならなかつたのだが舍監がやはり泣き乍ら忠告されたので先生に濟まない様で泣いてしまつた。舍監はきつと忠義顔の家番の言葉に感心したのだらう。」

舍監といふのは其晩はH先生で、先生は青木の家の近所に住んで居られて其上私達の主任であつた。

青木はしばらく涙をためて黙つて居たがやがで言つた「けれどあの家番と言ふのはそんなにいい女ではな

い。僕が棄てた骨を拾ひ上げて自分で埋めたといふのも、幽霊が出て惱まされると言ふのもみんな彼女ら自身のためである。僕があんまり彼女が本氣の様に言ふので、ふと之からはお前の家の家賃は拂はないでもないと言つたらやはり其儘喜んで居たからよ」。彼はどうしてもあの女を好ききれない様な口で言ふのであつた。

私は以上の話をきいた丈けでは其女家番が良い人間であるか又は悪いのかちつとも解らなかつた。只私はみんなを哀れに思つた。青木の言をきけば尤もではあるやうだが一面、多少の打算があるにしてもやはりあれだけの忠義立てをする女の心が解る様でもあつた。ひよつとしたら本心から青木の墮落を（青木は色々いたづらからその頃もう退校されんばかりであつた）諫めたのかも知れぬとも思つた。それを青木がまちがつて家賃を拂はないでも良いといつたことが非道く女を侮辱した様に思はれた。けれど一方其女がそれを有り難く受けたのも亦變に思はれた。

三度目には其女家番は私達の部屋までやつてきた。そして彼女は片手に重箱の風呂敷包みを持つてゐた。その上彼女の後にはいつもとちがつて、一人の營養不良の子供が寒そうに震へ乍ら影の様にくっついて居た。

寄宿舎の小使がまた青木を呼びにきたのであつた。

「青木さん、面會人ですよ、おどろいの人が。」小使が入口の戸を少しあけて中をのぞきこみ乍ら「青木さん」

と呼んでゐた。そして直ぐ廊下をバタ／＼と走つて行つた。

「またきたか、困るな、あいつは今度はどんな事を言ふかな」青木は英語のリーダーを見入りながら（青木は英語が好きだったので大概の場合英語ばかり勉強して居た）誰言ふともなくひとりごちた。

そして次に私の方を向き乍ら言つた。

「又、おど、いのがきたね、あいつ、いつまでやつてくる氣だらうかな。」

「さうだな」

「行こか行くまいか。」

「行つた方がいゝよ、行かないと又一昨夜のやうに舍監に話しこんで舍監の方からまた呼びにくるのよ、今日はK舍監だよ」

「さうね、それではまた行かなきゃならないかな」

青木は私とこんなことを言ひ合つていたがやがて不快げに立ち上つた。いかにも屈托げに歩くらしく廊下の板のきしりがギシ／＼と妙な音を立てゝ居た。何だか此の三日來青木の影が淋しくなつた様に思はれた。私は茫然と、代敷から目を離して窓の外を眺めていた。私達の部屋は北寮二階の五室であつた。

二月の夜が私達を冷たく包んでいた。外面を吹いている寒風が、植込の木々の梢を靡かせ、屋根の蔓をかすめてうなり乍ら涉て行く。黒い嵐であつた。

寮の屋根上に魔人の様に這つている松の枝がびゅうびゅうとうなつてゐた。

屋根の上の落ち葉がカサ／＼と飛んでいる。庭の木々はしよつちゆうサラサラと音を立てゝ居た。

廻轉窓がひつきりなしにかた／＼と音を立てる。其の音と寮の間を張られている電線がブン／＼うなるの  
どが遠くからと近くからと不調和に耳に響く。

町の方から物凄く犬の吠聲が間歇的にきこれてゐた。

時々南寮側の井戸のつるべが金屬的にキイキイときしるのが風のまにまに耳を襲つた。

外は眞黒いだけで月もなく雪も降らない。

窓から首でも出したら、頭はすぐ氷の様なもので張りつめられそうだ。——風がなかつたら外の空氣はす  
っかり凝固してしまいそうである。

私達は室の中に小さくちこまつてゐた。凡ての生徒がみんな眞正直になつた様に、寮の中はひつそりし  
てゐた。

電燈が苦しうについてゐた。

火鉢は室の中央にあるなり誰もあたつてはいない。最前かなり澤山炭をついでいたのがもうすつかりおこ  
つてしまつてゐる。部屋の中にあるので誰もそこまであたりに行かうとはしない。誰も自分の席に持つて  
こやうともしない。空氣が無暗にあたゝまり、炭酸瓦斯がふねた。他の二人は何か一心に勉強してゐる。

出て行つてから二十分程したら青木が歸つてきた。寒さうに震へ乍らきた。そして机にはかゝらずにその  
まゝ火鉢のそばに椅子を運んで縁に足をのせてあたつてゐる。今夜はいつもよりおだやかだつたらしい。

私ももう勉強にあいていたので同じく椅子を持つて行つた。そうして青木と向ひ合ひ乍らやつぱり足をふ  
ちのせてあふつていた。



『どうだつたかね、今度は？』。私は青木の顔をのぞきこむやうにして尋ねた。青木はいつもどちがつて淋しそうにしてゐた。私は此間の話してから段々其事に對してドラマチックな興味を感じているのであつた。

『すぐくるよ、あの女が直ぐくるよ。』

『家番がかい、こゝに？』

『あゝ、こゝにだ。』

私はその女がどうして部屋にまでやつてくるのだなど不審に思つた。どんな女かなあとも思つてゐた。どうして一緒につれてこなかつたのだらうとも考へた。

成程足音がしてゐる。バタバタバタ／＼と異つた足音が錯綜してきこえてくるのは一人ではないらしい。やつぱり其の音は私達の部屋の前で止まつた。『こゝ、こゝ、』と小供の聲がした。すると、

『御免下さい。』と今度は女の聲がして、入口の戸がガタ／＼と敷居にひつか／＼と乍ら開いた。私らはみんな其方を見た。他の二人は今迄舎監の足音ではないかと思つたらしく一生懸命に本の上に目をこらしていたが此の不意の侵入者に驚いた様に見入つてゐた。二人とも一寸挨拶しやうとしてゐるらしかつたが、其女があまり貧弱ななりをしていたので一寸ごまざれたらしく只見守つてゐるのみであつた。私も其女を見たのは是が初めてであつた。一昨夜も其前夜もこの寄宿舎にやつてきたとは青木からきいたけれど實際見たのは此が初めてである。私もぼんやりみつめていた。青木は知らぬふりして火鉢の炭をつゝいて居た。女は委細なくは入つてきた。そして青木が火鉢の所に居るのを見て彼女も火鉢の方にやつてきた。女の後から小さいみすばらしい男の子がついてきた。それも母親のする様に私たちの横に、板敷の上に座つて手ばかり火の上にあ

ぶつてゐた。

私は足を火鉢のふちからおろした。青木はやつぱり其儘だまつてゐた。寒さのために急に聲が出なかつたらしく、しばらくして女は改めて挨拶した。

「妾は公人様のうちの家をあづかつてゐる女で御座います。女はこゝ言ひ乍ら彼女の哀れな子供の頭を押へ乍ら自分と一緒に頭をさげさせた。

私は何といつていゝかわからなかつた。

「さうですか、初めて御目にかゝります。僕は山口といつてこの青木の友達です。」私は女の方に向くのを躊躇し乍ら言つた。實を言ふと此時私は此の女に對していゝ感じを持たなかつた。けれどやはり此の女が悪い人間だと斷定することはできなかつた。

「公人様、あなたは風邪引いたつてぢやありません、お休みなつせ、當りますつて。」

家番の女は青木の方を仰ぎ見乍ら言ふのであつた。

青木が面倒がつて風邪を引いたからといつて女を騙したんだらう。疊の上には成程床がとつてあるけれど誰も休んでは居ない。滅多にたたまない私と青木の共同布團である。

「いゝよ、ねるから。」青木は女を見下して突剣貪に言つた。女は黙つて火の上に手をかざしてゐる。子供も母親と同じやうに、時々母親をぬすみ見ながら手をあぶつて居た。

家番の女は見るからみじめであつた。此の寒いのに薄い着物をきておる。尤も枚數はかなり澤山あるらしいけれどちつとも温くはないらしい着物である。一番上に荒い棒編のぼいしんをきてゐるのが滑稽にも哀れ

に見えた。どれも垢がつめたく光つてゐた。髪は滅法に壞れてゐる。腐つた油の臭が稀薄になつた空氣の中にひどく飽和していた。火にあぶれた顔は赤くほてつて荒れた赤い頬はばん／＼はれたようになってゐた。ひつきりなしに鼻をすゝるのがいぎたなかつた。四十位のこの田舎女は充分疲れておる。火鉢の上に突き出された女の手は眞黒だ。そして節高い指の先から手の甲までのこさずひびだらけである。指と指の間の谷には大きい赤ぎれがさしてゐた。

小供も亦みじめであつた。頭には小學校の汚い帽子をのせてゐるが着物は又母親に劣らず汚い、雁首など眞黒だ。けれど小供らしく、赤くはれ上つた手の甲からは火鉢の火が透きそうだ。彼は見知らぬ所にきたといふことで彼の貧しい母親のもとにつめよつた。時々窓の外の暗い夜をおびれた様に見つめてゐた。

「本當に早く中學校を卒業して海軍にならなければなりませんよ、公人様」。女はふと青木に願ふともなく言つた。どうして青木に海軍になれと言ふのか私にはわからなかつた。青木が海軍になるなんて今迄きゐた。こともなかつたから。

けれど女は私達の前ではそれ以外あんまり言はなかつた。「お前さん達、さいてお呉んなつせ」と今にも言ひ出しそうな口と目であつたがつい口をきらなかつた。

青木は間もなく椅子からはなれて疊の上に仰向けになつた。延ばした彼の足が女の鼻先までとどいてゐた。するといつのまにか青木は蒲團の中にもぐりこんだ。女はつと立ち上つて青木に布團をきせてやつたり、風がは入らないやうによく夜具をととのわたりした。

「この子も今度四月になつたら中學校に入れやうと思ひますけん宜敷ふ頼みます」。女は誰言ふともなく、其

子の頭をなで乍らふと言ふのであつた。帽子から軽い水蒸氣が立つて居た。

女の目も子供の目もおどろと常に何かを恐れてゐるやうにみえた。

家番の女はまもなく歸つた。そして歸る際に、携へてきた重箱から餅をとり出して、折よくそこにあつた古新聞の上にあけた。

「公人様、粗末ですばつてん、こけ、置いときますけん、後で一緒にたべてくんなつせ。」女はこう言ふのであつたが青木はきこえない風してだまつてゐた。

私は何となく其女に氣の毒な感じがした。で

「有り難ふございます」といつた。立ちかゝつた女はそれには答へないでそのまゝ「さよなら」といつて部屋から出て行つた。哀れな小供もやはりその後からついて行つた。

外面はいつか嵐のなかを吹雪が降つてゐた。ひゆう／＼と降りつけていつまでも止みそうもない。限り無い空からひつきりなしに落ちてくる雪をみるとどうしても直ぐに止むのだとはおもへない。地球が亡びるまで降りつづけそうに見える。

雪は窓に打かける。紛々と降るのが電氣に白く反射することがある。固い霰の様な塊が窓にうちかける毎に、窓はピン／＼と鋭い淋しい音を立てる。開いた廻轉窓から時々雪がふりこんできた。松の枝は益々うなる。寄宿舎横の竹林の竹がすれ合ふ音もきこえる。それらの折れる音が時々耳朵に強くひびく。魂の底にこたへる音であつた。

私はやはり火鉢に寄つたなり黙つてゐた。二人の黒い影が室から消れて行つた後までも、私の頭の中には

まだ其の影が残つてゐた。自分の直ぐ横の板敷の上にはまだ、黒くうづくまつた家番の女と其子供の姿が残つておるやうであつた。腐つた髪の毛がまだあたりにたゞよふて居た。

私は何となく其家番が哀れに見えたけれど、やつぱり良い感じがしなかつた。疲れきつた彼女の目の中に何だか一筋流れてゐるやうであつた。でひよつとしたら青木が言ふ通り良い女ぢやないかもしれないと思つた。

青木は家番の女が歸ると又まもなく床の中から這い出てきた。そしてやつぱり私と向き合つて火鉢に當つた。

「あいつ笑はせることを言ふ奴だ。あれがどうして小供を中學に入れることができるか」。彼は起き上りさまた言つた。青木には他の言葉は残つて居ないらしい。疊の上におかれてあつた最前の餅をおしのけて彼はそこに座つたなり火鉢を引きよせた。疊の所は板敷から丁度四角火鉢の高さ位あるので都合が良いのである。

青木は何の氣なしに一つの餅を取り上げた。今頃は丁度舊の正月前だから多分去目かおとゝひについたのだらう。黄ない粉がばら／＼と火鉢におちた。それが火にやけると一寸いゝ香がする。

「きたないやうだね」。青木はこゝろ言ひ乍ら又元の所に投げ入れた。

「かたいだらう。」

「うむもうひどくかたいんだ。飢<sup>が</sup>ゐた時にでも思ひ切つて喰はなければとても喰へはしない。それにあの女が作つたのだと考へればね。」

青木は膝の上に胸をおしあてて、それつきり黙りこんだ。時々自分の爪にでも見入つてゐるやうであつた。時々外面の吹雪をみて居た。

點呼の時、廊下に並んで舎監の來るのを待つてゐる生徒の襟首に冷たい風が吹き入つた。

消燈の鐘が鳴ると二人の室友は床についた。私と青木とはそれから火鉢に炭をつぎながら當つて居た。いつのまにか外の吹雪は止んで静もり歸つてゐた。それでもやはり粉雪がしん／＼と降つてゐる。窓の枠の所には白く雪がふち取つてゐた。世界は今、最上の沈黙を保つてゐるやうである。

「今日また黒田から手紙がきたよ。青木はもう他の二人が眠つてゐる方を見廻し乍ら私に言つた。私はどうして彼がいつもどちがつてあたりを注意するのかと訝まれた。」

「東京の、昨日きたではないか」。

「うむ昨日きたけれど、又やつたよ。今狀差の所を見たらね。きつと僕のと行きちがつたのだらう。僕の手紙が届いたら、前日出したにかゝわらず又書いたのだらう」

「大分熱心だね」

青木は何にも言はなかつた。そしていつもの通り、無言で挑色の封筒を出した。例の通り封はまだ開いて居ない。私は何げなく手紙を受けとつた。青木はだまつて外の雪を見入つてゐた。

青木が私に黒田の手紙を代讀させるやうになつたのは一月の中頃以來のことだつた。(黒田の手紙に限つた

ことはないが。)それまでは、一人であの讀みにくい手紙を判じ讀みしてゐたのであらう。

或日のことであつた。青木が私から全く縁遠い様な西洋の色封筒を目の前につきつけた時私はびつくりした。初め私はこんな手紙が自分にくる筈はないがなあと思ひ乍ら青木が差し出すまゝに取つてみた。そして宛名が青木だつたのを知つた時、私は無造作に受取つたのを少らず恥ぢた。

「讀んで御覽」青木は氣にもかけずに言ふのであつた。

「君にきてるのぢやないか、いゝかい」

私は解せない顔で問ひ返した。

「いゝよ、いゝからよんでみる」

「でも封がきつてないではないか」

「自分で切つたらいゝよ、大丈夫だ」。

青木は無造作に笑ひ乍ら言つた。

私は珍しうに封筒の表裏を見た。最初の時も桃色であつた。女の字とは想像できた。けれど直ぐそう斷定するわけに行かないものがあつた。どしふのは先の鋭いペンで書いたらしく繊細な字であつたけれど、どこか男の字らしい所もあつた。それに宛名には青木公人君としてあつた。差し出し人は立派に住所をしるしであり、夫に黒田梢といふ名前が必しも女の名であるとは斷定されなかつたから。

私は解らない乍ら封をきつてみた、すると突然中から良い匂がしてきたので一寸どまぎれてしまつた。中の文字を見たら直ぐそれが女に相違ないことが知れた。

私は其時かすかな昂奮を意識した。私は見てはいけないものを見る様な不安と恐れと興味を感じたのであった。

そんな手紙を見るといふことは全く私には生れてから初めてのことであったから。私は少し読みかけてからまたも一度青木の顔を見た。

今にも青木が「もういゝ是から先はみていけないんだ」といひそうに思ひたからであつた。青木が、私らが夢想も出来ないことをなし得ることを私に示して單に彼が自分の優越を誇り度がつてゐるのかもしれない。或は嬉しさのあまり一寸自分に見せたのではあるまいかとも疑はれてきたからであつた。

けれど青木はちつともかまはないらしく外の方を眺めてゐた。

私は變な安堵を感じ乍ら段々讀んで行つた。

私は最初の昂奮とちがつたそれを意識し出した。初めの方はさほごでもなかつたが次第に字が目茶になつて居た。判じて行かなければ只見たばかりでは到底讀める字ではなかつた。私はくすぐつたい様なもごかしさをおぼへ乍ら讀んで行つた。手紙から發する句が變に頭を刺戟して私の焦燥をいらだたせた。

私らが今迄見たこともない熱烈な文字が澤山並んでゐたのが私を目まぐるほしくした。

最後にくるとまごうかたなく、「懐しき公人さま、御許に、あなたの梢より」としてあつた。タブレット五六枚の長い手紙を讀んで私は軽い安堵と共に或る幻滅を感じた。判じて讀んでもかまはないからもつと長かつてもいゝがとも思ふのであつた。

私は知らない所を通つてきた時の様に、も一遍後をふり返つてみたかつた。私はほんのりといゝ句がして



くるその手紙を持ったまゝしばらく其文にかいてあつたことを思ひ浮べやうとしてみた。

「どうだ、面白かつたらう。」

不意に青木が私の直ぐ前で笑ひ乍ら言つたのをきいた時、私ははつとびつくりした。そして又恥づかしくなつてしまつた。

「そんなことが書いてあつたかい。」

青木がつゞけて訊ねた。

私はごまぎれてしまつた。實際何が書いてあつたかは覺えてゐなかつた。只、異様な色彩を持つた澤山の見しらぬ文字が私の頭の中に何の連絡もなく残つていただけであつた。

「そんなことが書いてあつたか忘れてしまつた。」

私は赤くなりながら答へるのであつた。

「讀めなかつたらう、あの字ではね。」

「いや讀めないこともなかつたが、何しろ六ヶ敷い字だつた」

「もう一遍讀んでくれないか、今度は僕もきいてゐるからね。」

青木が言つたので私は又讀みかけた。今度は最初の様に讀みにくゝ又異つた感情も起らなかつた。

私は一体どんなことがそれに書かれてあつたか今ははつきりおぼえてゐない。またその後來た十幾回の手紙の意味もちつとも頭の中には残つてゐない。

けれど一回一回あの熱烈な字が増して來ると共に女の心が段々段々激しくなるのを認めた。其後の手紙は

色封筒の時も、日本封筒の時もあつた。けれど手紙に佳い句をふりまくことは一ぺんも忘れてなかつた。又青木公人君の君も決して「様」になつてゐることはなかつた。

青木はいつも最初に私に讀んで貰つたなり自分では決して讀まうとはしなかつた。青木は又それに別段不服でもないらしく、その上あまり興味も感ぜぬらしく常に平然としてきいてゐるだけであつた。そして私が讀んでしまふと直ぐ焼き棄てるのであつた。

けれど彼女の手紙の中に「戀しき公人様とか、懷しき兄様とか、未來の妻より、結婚などの字に行き當つた時は私達はいふき出してしまつた。何だか吾々がそんな言葉で呼ばれるのにはあまりに隔たりがあるやうで滑稽過ぎてゐるやうに思はれたからであつた。

私も亦其後あまり彼女の手紙に昂奮するやうな事はなかつた。

青木が私に代讀したのは必しも黒田の手紙だけではなかつた。青木は大人から來た手紙で、續け字や略字で書いてあつたら讀めなくて直ぐ私に讀ませるのが例であつた。それで何事が起つたにしても最初の知りては私であつたのである。

其晩の手紙も桃色であつた。私はいつもの通り遠慮なしに封をきつた。手紙の中からはやはり例の句が流れてきた。けれど何だか私にはそれが安つぽく感ぜられた。私はもう彼女の手紙には良い加減に食傷してゐた。却つて退屈な様であつた。けれど青木がきつと彼女を喜ばせる返事を書くらしく手紙は一回毎に激情的になつてゐた。私はその経過をだまつてみてゐるのが一面面白いやうであつた。

私はいつもの通り小さい聲で読んで行つた。青木は窓の外を向いたり、自分の爪をいぢぐつたりして聞いていた。相變らずの下手な字の上に、略字や勝手な崩し字や變態假名が無暗に使はれてゐるので一層讀みにくかつた。其の手紙の文意もあまりいつもと變つて居なかつた。三日もあけずにくるくせに、いつも手紙の冒頭は其後如何御暮しですかであつた。

例により「戀しき公人様」とか「未來の旦那様」とか、結婚、新婚旅行といふ文字が引つきりなしに出てくるので私は參つてしまつた。「戀しき公人様」と聲を出していふのが頭の中にピンとくるやうであつた。口の中がもつれるやうないやな感じがした。

「おい、僕はもう戀しき公人様は止すよ、こんな字がきた時は飛ばすがいゝか、ね、」  
「そう言はないで讀んで行け、折角書いたのだから、戀しき梢が」

「莫迦なこと言へ」

私はおかしくて堪らなかつたが續けて讀んで行つた。

甘つたるい美文辭典的な感傷文字が長く長くタブレット五六枚も續いてゐた。

私は讀み終るとやつと安心した様に椅子から離れて疊の上に仰向けになつた。

「おい、山口、一体何が書いてあつたんだ」

「今讀んだぢやないか、聞いてたぢやないか」

「いや、實はきいて居なかつたんだ。」戀しき公人様」といふ言葉をきくとね耳の中に變にひびくんだ。それを考へて居るとそれから先がちつとも頭の中には入らないんだ」

「そうかね、ではも一遍讀み直そうか、それとも」

「いゝよ、所々説明すりや」

私が手紙から受けた印象は丁度自分の傍を通つて行く女のお白粉の香をかいだやうな薄いものであつた。

「眞先にね、君の兩親のなくなれたことを初めてきいたつてんだ。そして大層同情してゐるつて、私も兩親を持たないんですつて」私は面倒がつて要點をちよい／＼話すのに止めた。「君はあの女にそのことを言つてやつたんかい」

「うん、それから何だ」

「兄様は此頃御病だそうで嘸苦しいことでせうつてだ。近い所なら今でも飛んできますと。君は女を騙したね」

「かもうもんかい」

「それからね今度の四月は卒業でせうからきつと東京にいらつしやるでせうだ。君は今度卒業の様に書いてやつたのかい」

「どうだつたかな、よくはおぼねないよ、それから」

「兄様はこの學校に行かうと思はれますかだ。次が愈々例の結婚だ。まもなく結婚できるのがうれしいと。どうかうれしいかね」

「莫迦」

「それから新婚旅行だ」私はあの手なおまけにうそ字で、けれども熱したらしく字劃など全く目茶になつて

ゐたその文の印象が残つていたためわざと青木に言つた。

「馬鹿、馬鹿、あいつそんなことを書いてるのか」

「いつも同じではないか、今日に限つたことはないよ」

「……………」

「それからね」

「もういゝよ」

「それからね、おばさん（彼女は伯母の所に居た）が知つてしまつたらしいとあるよ」

「そうか、けどかまはない」

「それからね」

「うむ」青木は少しまじめになつたやうであつた。

「それからいつまでもだ、永久にだ」

「もういゝ、もう充分だ」

「それからね、戀しき公人様だ、未來の妻よりだ」

どうく私ばかりかいたした。青木はあまり氣にかけては居ぬらしかつた。ふと青木を見ると彼はやつぱり、ちつと窓の外をみて居た。雪はやつぱり降つてゐた。今夜はきつとつもるにちがいない。私も淋しくなつた。

青木は又しばらくして一つの手紙を出した。それは一見して大阪の北野といふ彼の伯父からであると解

つた。長い間代讀してゐるうち私は彼にくる手紙は大概其筆を見られるようになってゐた。それを讀むときは二人とも平凡なまじめさであつた。それには伯父が青木の家を入札するため近い内來大するからそれまで家の方に注意して居るやうに書いてあつた。私は北野氏の手紙を青木に返した。青木はそれを机の中にしまつた。私はまた傍に置いて居た黒田の手紙をとりあげた。

「忘れてゐた。それから讀んでしまつたら焼いて下さいませだ。焼こか、」

「うん」

私は何げなく手紙を火鉢の中におとした。火はおこつていたがやつぱり直ぐはもじきれなかつた。紫色の煙が私らの目をいたくした。五秒もすると手紙は一度に燃え上つた。私はまたふと青木の顔をみた。青木はけむそうに火をさけてゐた。青木の顔がひどく蒼白い様に見えた。窓の所を見ると丁度焰がまつかにうつゝてゐた。真冬の夜更け二人が火をかこんで向きあつてゐるのが丁度遠い所、例へば極地の様な所で二人が淋しそうに寒さに震え乍ら焚火してゐるやうに窓にうつつて居た。けれど焰は直ぐ消えてしまつた。窓の外は再び暗くなつた。

雪は相かはらずしん／＼と降りつもつてゐた。私はやつぱり淋しさに襲れた。

時計は十二時近くを指して居た。私達は驚いて床には入つた。青木は彼の蒲團を破つてしまつて洗濯屋に呉れたので去年の十二月以來私の床と一緒に寝るのであつた。私は其晩目が冴れてちつともねむれなかつた。廿分程経つて私は

「おい」と言つてみた。淋しくてならなかつたので、青木が眼さめてゐるかどうかと思つて、

「何かい」

青木は何げなく答へた。彼もねつからないとみえる。それつきり私もまた黙つてしまつた。

「おい」しばらくすると今度は青木が言つた。

「何か」私は何でもないだらうとは思ひ乍らもなつかしいやうな氣がして答へた。

「僕はあの女はもう止めるよ。」

青木が突然言つたので私は一寸驚いた。

「黒田かい」

「うん梢だ」

「どうしてだ、そんなに急に」

「急でもないよ、それにあんな女にかまつたつて仕様がないう」

「そうかもしれないが可愛想ではないが、切角あゝ熱心になつてゐるんだもの」

私は本當に女が可愛想に思はれた。此分では女は死にはするまいかと思つた。何だか私にはそう思はれてしかたがなかつた。あの女がやつと中學四年生の青木に對しあれ程激情的であるからにはきつと悲觀して死んでしまひそうに思はれたのである。いつか「親もなく只一人の伯母に厄介になつてゐる私は貴方がただ貴方だけがいつまでも頼りです」と書いてよこした女のことを思ひ出した。

「可愛想でもしかたがないよ、僕はもうあの女を忘れかけてゐる。そして僕には今もつと重大な事があるんだ」

青木は言ふのであつた。二人とも仰向けに並んでゐる。しばらくして又青木が言つた。

「君、あの女に手紙をやつておくれね、僕の代りに。青木は今病氣がひどくなつてもう何も書けないからつて。そしてもうとても助かるまいつて」

「そんなことが書けるものかい」……「こんなことを書いたらひよつとしたらあの女が東京から飛んでくるかもしれないよ、」

私には本當に、あの女が夢中に東京から貧しい姿をしたなり最大急行で飛んできそうに思はれたのであつた。

「そんな事はあるまいけれど。が困つたな、僕は本當にあの女にはもう何の興味も無いんだよ」

青木は横になつて私の方に身体をむけた。呼吸が暖く私の首にかゝつた。私はこんなにしんみりとした青木を見たことはなかつた。私は平常、非常に浮調子で、それも晝であれば晝である程、澤山の人が居れば居る程人が笑えば笑ふ程はしやぎたがる青木を見てきたのである。青木はいつもおしやべりであつた。凡ての場合喜劇役者であつた。私はこんな時彼を憫ますには居られなかつた。けれど二人居る時、彼は割に落ちついてゐた。私はこんな時彼をなつかしく思つた。私は、善良な性であり乍らあんなことをして歩く青木を好まなかつた。青木は損な性質であるといつも思ふのであつた。

「ね、どうか書いてやつてくれ給ね、僕は今もつと忙しいことがあるから。それに僕はもう女は止めた」

青木は言つた。私には彼が女は止めたなどいふのが一寸變にひいた。青木は本當に自分が墮落してしまつたかの様に思つて居るのかもしれない。彼は時々自分を一番墮落した者の様に言つて得意がることもあつ



た。けれど私の知つた所では彼はまだそんなに多くの女を知つて居ない。小學校から知つていたOKと云ふ女とこの黒田とを除いたら。外には居ない筈だ。

私は何だか黒田は可愛想であつたが青木が一時も早く彼の沈淪から逃れやうと試みてゐるのを見ると青木も哀れになつた。思ひきつて黒田には何とか書かうとも考へるのであつた。

私はそれから長く目をさまして居たが青木はもう聲をかけなかつた。目はつぶつてゐるが勿論ねむつたのではないらしい。それは呼吸でも分つた。只私を面倒がらせまいと思つたのだろう。此の間の父の話から大變考へてゐるらしいと青木をいとしく思つた。私は急に寒くなつた様に青木の方につめよつた。

青紙で蔽ひをした電球は(私は冬や秋頃、こんなことをして自分の感傷の世界に浸るのであつた)青く私たちの上に光を投げていた。

世界のうちはいつまでも鉛色に静もつてゐた。

私は知らない間に眠つてゐた。

私が黒田梢について知つてゐることは凡て青木からきいたことである。勿論所は東の東京と西の長崎であるから見たことなんかある筈がない。青木は黒田に就て、其女が顔は少し丸顔であつたがからだは一般に瘦形のやうだつたといふ丈けで其他に就てはあまり言はなかつた。どんな顔だつたか青木自身もよくはおぼへ

て居ないのかもしれない。そして青木は又その女を見た時美しい女とは感じなかつたかもしれない。

「どんな女かい」と私が訊ねると、「覺てゐるものか、一寸見たきりだもの」といつて、只それだけ説明するのであつた。青木は其女を汽車の中で知り合ひになつたそうである。此冬休に彼が大坂に歸省する時岡山あたりから其女が自分の傍の席に腰かけてから知つたのだと彼は言つた。私は其れをきいた時やつぱり彼の浮いたやんちやな心が起つたのだなあと思つた。實際青木はいつも何か自分の遊び、あの頃青木はどんな眞剣な事にでもこの字の意義位の態度でかゝつてゐるやうにみえた、この遊びの對象を求めるのに腐心して居た。ミステバスな青木はいつも飛んで歩いてゐるやうであつた。蜘蛛が巢を張つてゐるやうにして人の引かゝるのを待つてゐる如き悠長は彼には出來なかつた。むしろ彼は人が蜘蛛の巢を張つて居たら自分から引かゝる工合であつた。

青木はいつか得意になつてこんな話をした。彼は自分の傍に女がゐるときはわざと自分の本を讀むのだそうだ。といふのは其本の表紙にはいつも××中學校の名と自分の姓名が書かれてあるのであつた。其時、女らは色の白い美男の青木の顔と彼の名前を知つてしまふのである。そして其女が急に下車しやうにないど彼は一時間もしないうちに話しかけるのである。青木はこんな時決して良い女かよくない女かはあまり氣にかけない性質であつた。是がいつも成功するとは統計でも取らなければ別らないが黒田の場合は之にちがひなかつた。といふのは黒田の事を私に話した時、青木はまたこの政策を私に言つたからである。

私は女に就て全く無知であるけれど黒田といふ女があまり教養のない女にちがひないことは彼の手紙でも解る。文章は何か外の本からでもうつしたらしく美文體であつたけれど其文字に至つては全く支離滅裂で

あつた漢字變態假名は殊にそうであつた。本を横に見乍ら片手で手紙を寫したらしいと思はれる程、はね廻つたり其上他のラインまで侵入したりしてゐた。又十回そこらの手紙ですつかり熱しあげた所を見てもそう思はれた。今まで青木自身がわざと興がつてたきつけたのも原因しているにちがゐないが。そして女は職業女であつた。それは東京の茨原の某製絲工場に出て居るのであつた。手紙には伯父の會社とか書いてあつたが本當かどうか解らなかつた。「私は父母に死なれ一人の伯母を頼つてゐるのです」と書いてよこしたことがあるから父母は居ないのだらう。又中國の田舎から態々東京に出たのだからこれは本當だらう。

翌日は良い天氣であつた。珍しくも太陽が空に出て居た。庭の木々にも、寮の屋根にも、學校にも世界中雪が積つて居た。そしてあたり一面がギラ／＼と眩く輝いて居た。冬になつても減多に雪の積むのを經驗しない私達はやはり雪が降つた日は何となく嬉しかつた。

私と青木とは其日の午後(丁度其日は土曜であつた)上久原の青木の家に行つてみた。午後二時頃なので太陽はまだひくゝ空にかゝつてゐた。

私達は寒さに震へ乍ら外套の襟を高くして雪解けの道を上久原に行つた。

今朝までギラ／＼と輝いて居た地上は私らが四時間の授業の間に大概融けてしまつてゐた。只、屋根裏や畑の隅や山蔭の所に白班に残つてゐるだけであつた。

町の所々の家角には大きな雪だるまが淋しくどけかゝつたまゝ立つてゐた。

上久原は寄宿舎から東の方に十町餘あつた。淋しい一筋町を三町程行つてから牢屋の坂を昇り、××病院の横から國道を眞直ぐに五六丁行くのであつた。それから田の中と畑の中を通る小路を一町程行くと青木の古い家にきた。

青木の家とあの女家番の家とは同じ青木の屋敷内にあつたが其間に二三枚の畑を隔てゝ居た。

私らは先づ青木の母屋おもやに行つた。

青木の家は古い格好な家であつた。此夏以來、父が死（母はもつと以前に亡くなつた）んでからは誰も住まないで家は思ひきつて荒れてゐた。

「大變荒れてゐるな、」青木もやはり久し振りにきたのであつた。私達は庭の中をあちこち歩いた。庭は落葉だらけであつた。私達はその上を淋しく音たてゝ歩いた。やゝ小高い所にある青木の家からはよく大村灣が見えた。海は鼠色になつて重苦しく黙して居た。

「おや、この木もきつてしまつてゐる。これも……あれもだ。」青木は庭の中や家の周圍を繞る大きい木々を見乍ら、其内足らない木を見つけたして、その切株を指して言つた。

「あいづら、いつのまにか伐つてしまつたんだな」

彼はこう言ひ乍ら何か思案して居た。

「是等の石はね、僕らがこゝに來た時（青木の家族は彼が尋常五年の時こゝに住んだのであつた）人夫を傭つて海から運んだのだ」

青木はふと庭の石を指し乍ら私を省みた。私を何だか淋しい氣がした。

「これから家番の家に行くんだ。君もきてくれない？、一緒に」彼は再び私に言った。けれど私達は椽側に座つたなり急に立たうとはしなかつた。

裏の檜の枝から雪がドサリドサリと落ちたのが私達の頭の中に重くひいた。何とも言わない淋しさが私を襲ふのであつた。

「是は僕が尋常五年の時書いた字なんだ」

青木はまた淋しそうに戸板の落書を示し乍ら言つた。私はこんなに純に淋しがる青木がいとしくなつた。私はふと昨夜青木が頼んだ黒田への最後の手紙を思ひ出した。そしてちつとどんな事を書かうかと考へこんでゐた。女の哀れな姿を思ひ浮べ乍ら。

「此へんに僕の落書がも一つある筈だがな」

ふと青木はまたこう言ひ乍らあたりを探してゐるのであつた。

私は黙つて青木の探すのを見て居た。私は益々淋しい氣がしてきた。

ドサリと又檜の雪が落ちたらしい音がした。